

4万人が集まった！インドネシアの人気サブカルフェスティバル「ハローフェス」

2015.02.10



2014年11月22日と23日の2日間、ジャカルタの国立スナヤン競技場で行われたHelloFest 10 Indonesian Motion Picture Arts Festival（略：ハローフェス）という、インドネシアのサブカルチャーが一堂に会するイベントにおじゃましました。



会場外の至る所でコスプレヤーの写真撮影が行われていました



フィルムの上映会が行われている屋内会場の様子

会場ですぐ目に入るのが、日本で見慣れた漫画やアニメのコスプレをしている大勢の人たち。参加者と写真を撮ったり、アニメ談義に花を咲かせています。その数の多さと熱気に圧倒されました。

中には、日本でもまだ登場して間もないアニメキャラクターのコスプレヤーもいて、その情報キャッチの早さにびっくり。周囲には手作りグッズのお店が建ち並び、呼び込みの声も賑やかで活気に溢れています。イベントも盛りだくさんで、映像コンペティション、コスプレ・コンペティション、アイドルコンサート等、2日間でたくさんの催しが行われます。

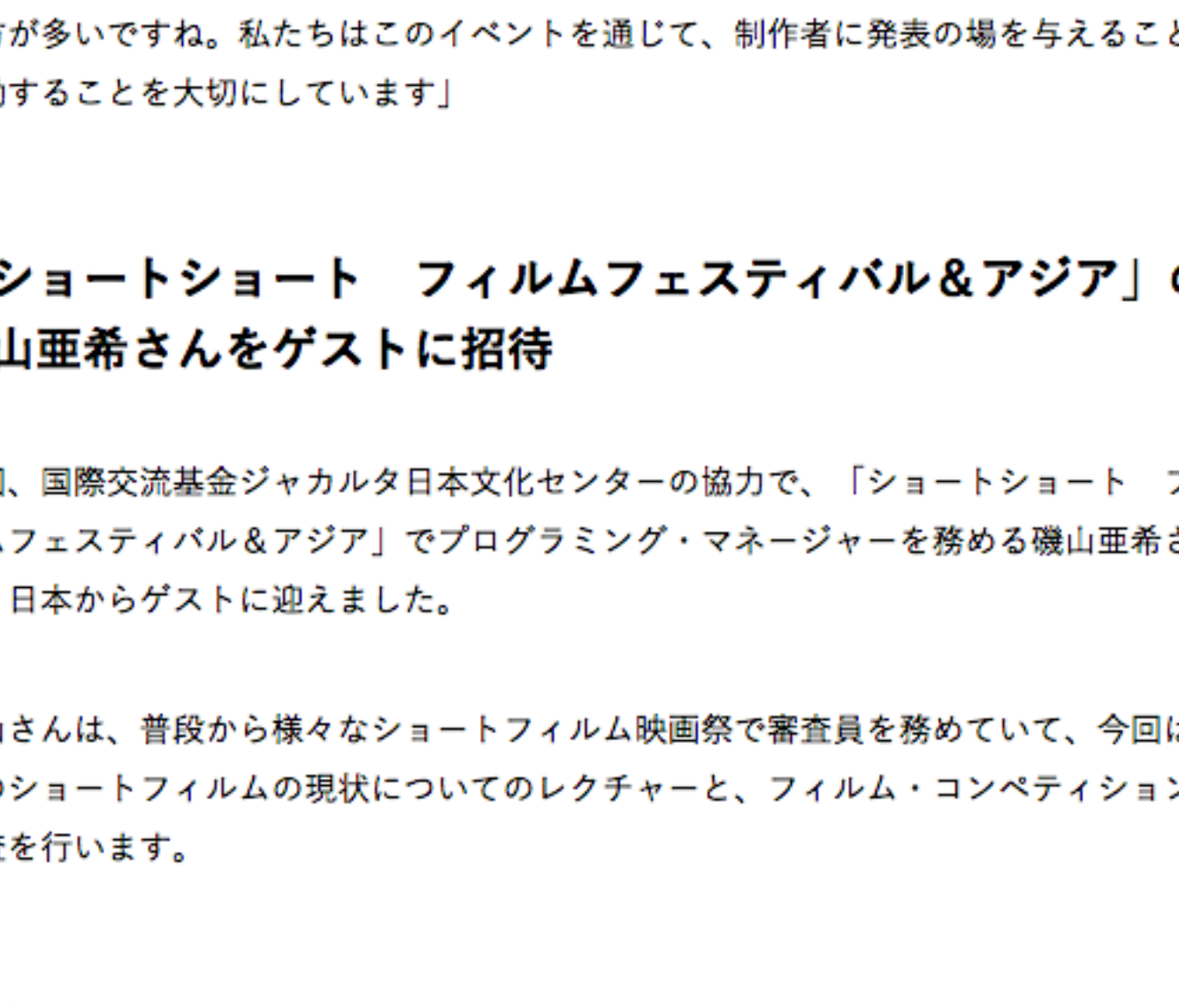


このフェスティバルには、インドネシア中から2日間で約4万人もの参加者が集まりました。JKT48の初コンサートが、以前このハローフェスで開催されたことから、人気の程がわかんと思います。



屋外のライブの様子

屋外の特設ステージでは、日本のポップミュージックやアニメミュージックのライブが開催されていて、歌詞も日本語のまま歌っている人が多くいました。



イベント主催者にインタビュー



主催者のWahyu Adityaさん（左）と国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの小川所長（右）

このハローフェスの主催者のWahyu Adityaさんに聞きました。Wahyuさんは、自身が映像クリエイターである傍ら、クリエイター学校にも主宰しています。Wahyuさんはどのような経緯でこのイベントを開催するようになったのでしょうか。

Wahyuさん
「当初は映像に関するコンテンツだけを扱うイベントで、参加者は300人という小さなものでした。その後、日本のコミケ（※）を参考にして内容を充実させていくに伴い、参加者が年々膨れ上がってきたのです。参加者の年齢は、10代後半から30代半ばくらいの方が多いですね。私たちはこのイベントを通じて、制作者に発表の場を与えること、激励することを大切にしています」

「ショートショート フィルムフェスティバル&アジア」の磯山亜希さんをゲストに招待

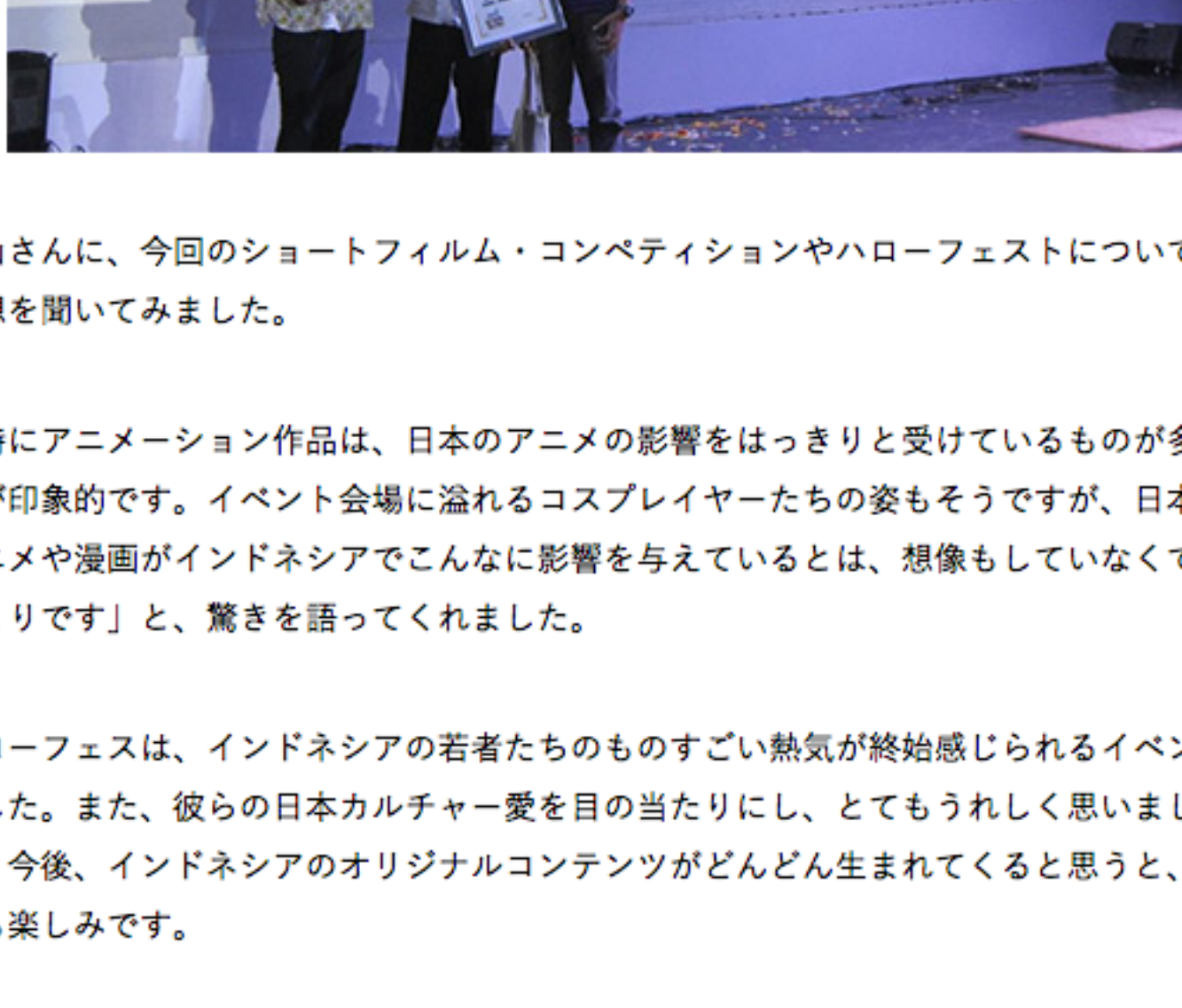
今回、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの協力で、「ショートショート フィルムフェスティバル&アジア」でプログラミング・マネージャーを務める磯山亜希さんを、日本からゲストに迎えました。

磯山さんは、普段から様々なショートフィルム映画祭で審査員を務めていて、今回は日本のショートフィルムの現状についてのレクチャーと、フィルム・コンペティションの審査を行います。

日本のショートフィルムに関するレクチャー

磯山さんのレクチャーには、インドネシアの映像制作プロダクション勤務の方や、漫画のクリエイター学校のディレクターをはじめとして、実際にコンテンツ制作に関わる参加者の姿が目立ちました。

磯山さんから、日本ではスマートフォンの普及によって隙間時間にショートフィルムを見る視聴者が増えたこと、現在はそれによってショートフィルムビジネスが成り立っていること等の話があり、参加者たちは活発に質問をしながら、コンテンツビジネスの現場の貴重な生の声に真剣に耳を傾けていました。



レクチャーの後で参加者の1人は、「インドネシアでは映像クリエイターがただ好き勝手に作って、個人個人がネット上に公開しているだけで、まさかショートフィルムがビジネスになり得るとは思いもしなかった。今後インドネシアでも、クリエイターが作ったコンテンツが仕事になる仕組みを作る必要がある。そのことに気付く良い機会になった」と、活動のヒントを得た興奮を語ってくれました。

ショートフィルム・コンペティション

様々な催しがある中で、今回は初期から開催されているメインイベント、ショートフィルム・コンペティションについてレポートします。

このコンペティションは、会場の中で最大規模のホールで行われました。客席が真っ黒に見えるほど、大勢の人が埋め尽くされています。上映された作品はコミック風のものも多く、それらの作品が流れると、会場全体が揺れるようにドツと笑いが何度も響いていたのが印象的でした。こんなリアクションの良い観客を見るのは私も初めてで、作り手冥利に尽きる土壌がインドネシアにはあることを実感したのでした。

そして、いよいよ受賞作品が発表されます。

Best Movie Animationには、Rizki Pratama Noviantoさんの作品『White-Collar Time.』が選ばれました。この作品は、主人公の男性がサラリーマンとして仕事一筋に打ち込み多額の報酬を得るが、仕事から引退する段になって、お金のために自分の時間を売り渡してしまっていたことに気付く……という、現代の人生のむなしさを表現した作品です。

クオリティーの高いアニメーションと、次々に展開されるテンポのよいストーリーには、思わずひきこまれてしまいます。

磯山さんはこの作品について「台詞がほとんどない中、メッセージがきちんと伝わってきました。アニメーションのクオリティー、ストーリーの両方をみて素晴らしい作品だと思います」とコメントしています。Rizkiさんには、Wahyuさんと磯山さんから表彰状と副賞が手渡され、観衆からは拍手喝采を受けました。

磯山さんに、今回のショートフィルム・コンペティションやハローフェストについての感想を聞いてみました。

「特にアニメーション作品は、日本のアニメの影響をはっきりと受けているものが多いのが印象的です。イベント会場に溢れるコスプレヤーたちの姿もそうですが、日本のアニメや漫画がインドネシアでこんなに影響を与えているとは、想像もしていなくてびっくりです」と、驚きを語ってくれました。

ハローフェスは、インドネシアの若者たちのものすごい熱気が終始感じられるイベントでした。また、彼らの日本カルチャー愛を目の当たりにし、とてもうれしく思いました。今後、インドネシアのオリジナルコンテンツがどんどん生まれてくると思うと、とても楽しみです。

※コミケ：コミックマーケットの略。アニメ、漫画、アイドルなどのカルチャーイベント。

企画名	HelloFest 10 Indonesian Motion Picture Arts Festival
日時	2014年11月22日（土）～11月23日（日）
会場	Tennis Indoor & Plaza Barat Senayan
主催	HelloFest
共催	国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（アジアセンター事業）ほか
URL	http://hellofest.com/

中村綾花：フランス・パリを拠点に活動するフリーライター。著書は、世界で婚活の旅をしながら恋愛・結婚事情をレポートした「世界婚活」（朝日出版）。有料コンテンツ・サイト「cakes」にてパリの本当の日常をレポートする「すっばんぼんパリ」連載中。<https://cakes.mu/series/3055>

